

死に近き芭蕉：芭蕉の曲翠苑新資料書簡を中心に

杉浦，正一郎

<https://doi.org/10.15017/2332910>

出版情報：文学研究. 48, pp.1-28, 1954-03-15. 九州文学会
バージョン：
権利関係：



[illegible][illegible]

芭蕉筆曲翠宛書簡（內本浩亮氏藏）



野坡筆芭蕉像

死に近き芭蕉

——芭蕉の曲翠苑新資料書簡を中心に——

杉浦正一郎

(一)

『奥の細道』の行脚を了へて、故郷の伊賀上野や湖南や京に旅寝の夢を重ねて門弟達と風雅の交りを楽しんでゐた芭蕉が、入門間も無い支考及び桃隣を伴つて足掛三年振りに江戸に帰着したのは、元禄四年の神無月も晦日に近い頃であつた。

住み馴れた深川の芭蕉庵は『細道』の首途に先だつて「俗なる人」に譲り渡してゐたので、橘町の彦右衛門と云ふものと借家を仮の住居と定めてこゝで翌五年の春を迎へた。やがて門弟達の尽力で深川の旧庵近くに芭蕉庵が再興され、五月半ばに彼は新しい草庵のあるじとしてこゝに入つた。かの彦根の許六が桃隣の案内で、この草扉を敲きその門人となつたのは仲秋の頃であり、九月には膳所の酒堂が遙々東下して芭蕉庵の食客となつた。

斯くてこれらの門弟を加へて屢々俳筵が開かれ、『深川集』その他の歌仙が成つてゐる。ところで翌六年の一月に酒堂が江戸を去つて後、芭蕉庵は深い憂愁に閉ざされるに至つた。それは芭蕉の「猶子」桃印の大病であつた。桃印は芭蕉自

身、許六に「旧里を出て十年余、二十年ニ及候て、老母ニ二度対面せず、五六才ニて父ニ別候而、其後ハ拙者介放ニて三十三成候。此不便はかなき事共おもひ捨がたく胸をいたましめ罷有候」（元禄六年三月二十日頃書簡）と書き送つてゐる如く、相当長年月に亘り手塩にかけた「猶子」であつた。大病と云ふのも、芭蕉が右書簡で「瘵性之事ニ候間」と云つてゐる如く労咳であつたらしく、六年になつて急速に悪化したものであらう。而も神魂を悩ました芭蕉の介抱の甲斐もなく、暮春の頃には不帰の客となつたのであつた。

この桃印の死は、芭蕉を悲歎のどん底に迫ひ落したらしく、判口宛書簡の「拙者、当春猶子桃印と申すもの三十余迄苦勞ニ致候而病死致、此病中神魂をなやませ、死後断腸之思難止候而、精神草臥、花の盛、春の行衛も夢のやうにて暮、句も不ニ申出候」（四月二十九日付）といふ文面によると、その死後断腸の思ひにとらはれて最早慰めの風雅も奪ひ去られて、句を口にする事すら出来なかつたのであり、それ程に芭蕉の悲哀は深かつたのである。かてゝ加へて、時候は暑さを増して来て住みづらい夏の日が続き、それに既にこの頃寿貞・次郎兵衛・理兵衛・まさ・おふうの系累達が同居してゐた筈であるから、いろ／＼の煩はしさや悩ましさ芭蕉を苦しめた事と思はれる。斯くて初秋の頃から扉を閉じて客を辞したのであつた。この頃の様を芭蕉は曲翠に「当夏暑氣つよく、諸縁音信を断、初秋々閑閑、二郎兵へハ小料理ニ慰罷有候。夏中ハ筆もとらず、書にむかはず、昼も打捨寝くらしたる計ニ御座候」（十一月八日付）と書き送り、判口には又、「羅生夏中甚暑ニ痛候而、頃日まで絶ニ諸縁」、初秋より閑閑病閑保養にかゝづらひ筆をもとらず候故、心外打過申候」と報じてゐる。

桃印病中の看護の疲労、死後の落胆、この夏の酷暑が芭蕉の身体を衰弱させてゐた様であり、芭蕉は自身でもこの年の

身の衰へを感じてゐたらしく、十月九日には許六に「当年めきと草臥増り候」と云ひ送つてゐる程である。ところでその冬から翌七年春にかけて、芭蕉は野坡・孤屋・利牛その他の連衆と『炭俵』の俳諧を興行し、四五年まへから胸裡に胚胎して来た「輕み」の俳諧への進展を求めて、その俳風の開拓に心を尽してゐたのである。併し、年は改まつても芭蕉の健康は必ずしも旧に復してはゐなかつた様で、正月二十日伊賀の意専に宛てて、「百とせの半に一步を踏出して淺漬の齒にしみわたり、雜煮の餅のおもしろく覺候こと、年の名残も近付候にやとこそおもひしられ侍れ」と書き送つてをり、この年は殊に身の衰へが感じられたのであらう。この事は膳所の正秀にも書き遣した様で、路通の『芭蕉翁行狀記』に「元祿七年、翁の齡五十一、老のなかばの春を迎へ、雜煮の餅むまく覺え、淺漬も齒にしみわたるなれば、としの名残もちかくくにやと、門人正秀がもとへ文のはしに書て送給ふ」と見えてゐる。「としの名残も近付候にや」の言葉は、新春を迎へてもかさなる年の重みが深く感じられる程に老衰した身体からの慨歎の声であらう。

然るに芭蕉の遊意は、既にこの年の歳旦早々から萌してゐたのであつて「蓬萊に聞かばや伊勢の初便」の歳旦吟には、『去來抄』に去來が「都、又は古郷の便ともあらず。伊勢と侍るは、元日の式の今やうならぬに、神代を思ひ出で、たより聞ばやと、道祖神のはや胸中をさはがし給ふか、どこそ承り侍れ」と評してゐる如く、行脚へとそぞろに心は動いてゐたのであつた。思へば昨元祿六年は、「誠隱閑律の中まで世のありさまのがれがた」き生活であり、「何角心うき事共多く取重候」（意尊宛、七年正月廿日書簡）と云ふ苦しい年であつた。市中に静閑を求めようとしても世俗の絆は容赦もなく彼を捕へ、世路の波は草庵の垣の隔てをも乗り越へて彼に襲いくるのであつた。而して、さうした世俗のわづらはしさが芭蕉を身動きも出来ない状態に縛り、彼の愛した市隱の境地をも容赦なく浸蝕しようとする時、物にとらはれる事を嫌い、

自由を求め、行脚を熱愛した芭蕉の胸中に、浮雲帰鳥への思ひが自づと燃え上り、「旅への誘ひ」に心動くのはまことに当然のことであつた。『猿蓑』の「草庵に暫く居ては打やぶり」の芭蕉の付句は、そのまゝ彼自身の心境の打出しでなければならぬし、これこそ西行・宗祇等の故人につらなる風流者のまことの心でもあつた。

元祿四年十一月十三日付、膳所の曲翠宛書簡によると「何とぞ今来年江戸にあそび候へ、又く貴境と心構候間云々」と、元祿四年江戸帰着早々に、芭蕉は今年来年と江戸に滞在した後は再び湖南に杖を曳く事を約束してゐたのであつたが、その約の如く七年春には「早く東麓庵の桜の比へと漸々旅心もつかれ初候。され共いまだしかと心もさだまらず候へ共、都の空も何となくなつかしく候間、しばしのほど成共上り候而、可懸御目と存候」（前引意専宛書簡）と伊賀・京・湖南等上方方面の旅を予定してゐたのである。併し「され共いまだしかと心もさだまらず候」と云ふ様にそれは未だ確定的なものではなかつた。旅へと心は急いでも芭蕉にそれを許さない寿貞尼の病氣、その他の家庭的な事情があつたものと思はれる。かくて芭蕉が旅心を満足させるべく、上方へと出発したのは元祿七年も仲夏の五月のことであつた。

(11)

芭蕉の元祿七年の上方行脚の出発日については従来三つの説がある。五月八日とする桃隣の『陸奥衛』の説、五月十一日とする路通の『行状記』の説、後の五月とする支考の『笈日記』の説である。支考の説は同書の尾張部に芭蕉の尾張の国に入つたのを「去年元祿七年前の五月なるべし」とあるのであるから筆の間違ひである事は明白である。問題になるのは桃隣と路通の二説であるが、これは路通の『行状記』が伝聞によつて記されたのに比して、桃隣は自身で見送つてゐる

のだし、『別座舖』等を参考にしても八日説が正しいとするのが定説になつてゐる。併し八日説に些か疑問が残るのは元祿七年閏五月十八日付去来宛芭蕉書簡の「拙者先月十三日江戸を歩出」とある記事を、どう説明したらよいかと云ふことである。十三日出発は他の書簡から考へて十五日に島田に着いてゐるので誤記かと思はれるのであるが、併しこれは十日の誤記と考へられても八日のそれとは考へられないのである。本書簡は内容から考へても真蹟と思はれるのであつてこの点解決に苦しむわけである。

『行状記』によると、大津の乙州が当時江戸の京橋のほとりに商用で滞在してをり、芭蕉は出発に當つて乙州に同行を誘つたのであるが、乙州に支障があり、止むなく次郎兵衛だけを伴ふことになつた。杉風・曾良・子珊等の江戸の親しい門弟達は品川・川崎まで、中でも曾良の如きは遠く小田原迄師に随行してその前途を氣遣つた。芭蕉の留別吟は「麦の穂を便につかむ別かな」であつた。

この句と『野晒』の旅の折の「野ざらしをこゝろに風のしむ身かな」や『笈の小文』の旅の時の「旅人とわが名よばれん初しぐれ」や『奥の細道』の旅の「行春や鳥啼魚の目は泪」等の句と比べてみる時、それ／＼の旅の首途に當つての心構への相違が理解されるやうである。「麦の穂を」の句には衰へた心身を駆りたてゝの、頼りない旅立ちの心細さがはつきりと覗はれる。「便につかむ」と云ふのも、便りにならない心身の弱さの自らなる表白であつた。

さてその後の東海道の旅の様子は荻野清氏がごく最近紹介された元祿七年閏五月廿一日付、曾良宛芭蕉書簡（『連歌俳諧研究』第六号所載・同氏論文）によつて詳細に知る事が出来る。その内容は同氏の解説に詳しく記されてゐるので簡単に筆をすゝめることにする。十五日に芭蕉は駿州島田に着いてゐるが、門弟塚本如舟が川奉行役のものであり、対岸の金谷に松

平淡路守が滞在してゐるので宿がないと思はれるし、明日はどの様にしてでも川越をさせると云ふので滞在したところ、その夜大風雨になつて洪水の爲川止めに逢ひ、止むを得ずこゝに三日間逗留した。

それから、廿二日に名古屋に到り、門弟荷兮のところに三夜滞在して荷兮・野水・越人等の饗応に預つてゐる。ところでこれらの人々は許六の『歴代滑稽伝』に「路通・荷兮・野水・越人・木因等は勘当の門人也」と記されてゐる人達である。勘当といふのは些か許六の言ひ過ぎであらうが——或ひは何か含むところがあつたのであらうか——彼等は志田義秀博士が『問題の点を主としたる芭蕉の伝記の研究』に詳しく論究された如く『曠野後集』によつて反芭蕉の態度を表明した門弟達であつた。而も彼等の態度はこの年初め去来から芭蕉の許に報じられてをり、芭蕉はその時「荷兮集之事、日々に御申越、其仕かた賤敷凡情を顯し候事、御とがめ尤に被_レ存候。され共平人の情常の事に候へば、少も御とんちやく被_レ成間敷候。萬世に俳風の一道を建立之時に、何ぞ小節胸中に可_レ置哉。彼等に似合敷心指にて候」と書き送つたのであつた。さうした門弟達を芭蕉自身の方から訪れて行つたと云ふことはちよつと理解出来難い事であるが、芭蕉としては彼等のさうした態度を常の人の事として赦し得る心の高さにあつたのであり、芭蕉が彼等に求めてゐたものはや貞享頃のあの堅張した俳諧上の交情ではなく、單なる古い誼みとしての交りに過ぎなかつたのであらう。さて、それから佐屋廻りを志し、佐屋の素覧亭に泊り、露川・素覧等と歌仙一折を巻き、伊勢の長嶋、久居等に泊つて五月廿八日に故郷の伊賀上野に到着したのである。

この旅中の芭蕉の身体具合は杉風宛書簡に「拙者道中嶋田あたりまでへつかえなども折々音づれ候得共、次第ニ達者に成候而、道、二三里、日により五里ばかりも養生の爲歩行、足場能所は馬にも乗旁致候而、無_レ恙上着致候」とみえるの

で理解される如く、必ずしも良好ではなく旅の草臥もひどかつたやうで、露川に「先いつぞや佐夜の泊り、殊の外の草臥故、染く共不_レ得_二御意_一、御思召残念之至ニ令_レ存候」(元祿七年八月二十日付書簡、以下七年のものは月日だけを記す)と云ひ送つてゐるのでも知られる。そして「上り懸直ニと存候処、持病いかゞと古老門下の者共達而東海道駕など力ニ可_レ上候よし故、京・大坂・旧里を過候て、貴境へハまはり会被_レ申まじく候。」(同六月十五日付)と許六に遣し、「今度旧里へ趣候刻、木曾路にかゝり直貴境へ御案内、許六方へと存候処、其節持病指出候故、道中無_二心元_一旨門人共達而申ニ付、東海道を下候而其元へ遅候。心外之至に存候」(六月十五日付)と李由に断りの手紙を出してゐるやうに、実は当初熱田から湖東彦根の方に足を向ける予定であつたのが、持病の為に止むなく行先を変更して伊賀に歸つたのであつた。

(三)

扱て、従来この七年の行脚の目的地は筑紫であり、芭蕉は西国長崎迄足を延ばす筈であつたと云ふ事が通説として行はれてゐる。

これは元祿十年刊の桃隣の『陸奥衛』の記事を何の疑問もなくそのまゝ受入れてゐるものと思はれる。即ち同書には「然ども老たるこのかみを、心もとなくや思はれけむ、故郷ゆかしく、又戊五月八日、此度は西国にわたり、長崎にしばし足をとめて唐土舟の往来を見つ、聞馴ぬ人の詞も聞んなどい、遠き末をちかひ、首途せられけるを、各品川まで送り出」とあり、故郷の兄の慰問、及び異国的な情緒に浸る為に長崎迄足をのばすべく出発したと云ふのである。ところで芭蕉の西国行脚についてこの書以外に全く言及してゐるものを見出し得ないのはどうした事であらう。濁子・杉風・子珊・野坡

・利牛その他の門弟達の錢別吟や素龍の「贈芭叟錢別辭」を収めて、伊賀の芭蕉のもとに送られたと云ふ『別座舖』に西国行きに関する一行の文も一言の句も見出し得ないのは勿論、芭蕉歿後の行状記や終焉記の類にも筑紫行脚についてはひとことも記されてゐないのである。桃隣が言ふ如く、この行脚の目的地が長崎であつたのなら少くとも何か一言ぐらいこれらの書中にそのことが記されてゐてもいい筈である。

次に、当時の芭蕉の健康状態から考へて、芭蕉はともさうした大それた望みを抱き得なかつたであらうと云ふことである。この事については既述した如く、前年六年は桃印の大病の折の看病の疲労、死後の落胆、そして夏の酷い暑さに苦しんだのであつて、「当年めきと草臥増り候」と云ふ程の疲労困憊ぶりであつた。そして年が改まつても「年の名残も近付候にや」と思ふほど、芭蕉に一入身体の衰弱を感じさせたのであつた。だから上方行脚にのぼつても嶋田あたり迄も体の調子が悪く、三百里の全行程を殆ど一日平均九里位の速度で旅した『奥の細道』の時に比べて、日にせいゝ二三里、多くても五里ぐらい歩く程度で、しかもそれも主に駕籠や馬による旅であり、持病の為に彥根への道順を変へて伊賀へ向ふ程に草臥果てゝゐたのであつた。伊賀の老兄の家に入つても年の加減か疲れも容易には恢復せず、閏五月五日になつても「いまだ草臥申候而遠方不罷出候」と水固に書き送つてゐるのであり、かてゝ加えて「一昨夕少持病気味御座候処云々」（閏五月十日付雪夢宛書簡）と云ふ如く持病も時々さし込んでゐる。斯うした芭蕉の身体の衰弱状態は一時的には良好に思はれても上方巡遊中はずつと変らなかつたのであり、そして夏を越してから九月八日に難波に向つて伊賀を出立してからも、何れ詳述するごとく二里程も徒歩し得ない程にくづをれてしまつたと芭蕉を慨歎せしめるやうに、その身体は衰弱の頂に達しようとしてゐた。これらのことは其角の『枯尾花』の「今年就中老衰なりと歎あへり」や支考の『笈日記』

の「まして今年は殊の外によりはたまへり」や、路通の『行状記』の「殊に此秋は氣短かに身の骨もとかりぬ」の記事が何れも芭蕉の老衰ぶりを述べてゐることと思ひ合されるのである。

以上述べた如き六年から七年にかけての、この芭蕉の身体具合に思ひ到つたならば、如何に彼が「古人も多く旅に死せるあり」と観念し、悲痛な野晒を覚悟しようとも、三百里の彼方にある西国長崎への旅寢は所詮彼にとつて夢想にも近いものであつたと思はれるのである。

次に此度の行脚の實際的な行程及び予定はどうであつたかに就いて述べよう。伊賀に歸つた芭蕉は老兄の許に滞在して半月の間身体の保養につとめ、かたぐ雪芝や猿雖等の土地の門弟達と俳諧に興じてゐる。彼が京に向つて出立したのは閏五月十五日過ぎ、十六日には大和加茂の猪兵衛の在所を尋ねて一泊し、十七日には大津へ出、十八日から暫く膳所に滞在してゐる。彼が上野を去つた原因は杉風宛書簡に「伊賀同名方あつく蚊も多候へば」（閏五月廿一日付）と見え、同じく曾良宛書簡に「のミ・かおほく夏中へくらしがたく候故、ぜゝへ出申候」（同日付）とある如く伊賀上野の兄の宅が風通しが悪くて暑く、それに蚤・蚊が多く夏中凌ぎ難いと云ふことであつた。それで芭蕉はこの夏を「夏中は膳所、折々京へ出候而去来とかたり、若は嵯峨去来屋敷に休足致事も可有御座候」（同上杉風宛書簡）、「追付上京、去来ニも逢可申候。嵯峨のやしきちいさく改候よし、是能閑地ニ候間夏中へこれにも居可申候」（同上曾良宛書簡）とあるやうに膳所、京に於いて送る予定であつた。そして事実彼はこの予定の通りこの両書簡を記した翌閏廿二日には多分去来に迎へられたのであるう、早くも洛西嵯峨の落柿舎に草鞋を解いてゐるのである。

そしてこの日には大坂から上洛して来た酒堂、伊勢神宮の長官の京見物の案内として洛にゐた支考、それに惟然、去来

等を交へて『市の庵』所収の「柳小折」の歌仙が巻かれた。次いで大坂の之道も芭蕉を訪ひ、『続有磯海』『砂川集』入集の「牛流す」の歌仙がなり、越中井波の浪化が去來の手引で芭蕉に入門し、『となみ山』収録の「鶯に」の歌仙を追加満尾させ、同じく「葉がくれを」等の歌仙も興行されてゐる。その他『ゆずり物』入集の為有・惟然・鳳侶・去來・之道等一座の歌仙もこの頃のものであらう。この落柿舎滞在は「此方京大坂貧乏弟子共かけあつまり、日々宿を喰つぶし、大笑ひ致くらし申候」（六月三日付猪兵衛宛書簡）と云ふやうな久方振りの賑やかな旅寝の日々であつた。

併しこの楽しい旅泊の中にも芭蕉は江戸に残して來た病人の寿貞や理兵衛、まさ、おふう等のことが氣懸りであつたものと思はれる。六月三日には江戸の猪兵衛に宛て「理兵へ細工無_レ之時分せめて煩不_レ申候様に御氣を可_レ被_レ付候。右之通寿貞ニも御申きかせ可_レ被_レ下候。おふう夏かけて無事ニ候哉。様子具ニ御申越可_レ被_レ成候」と書き送り、これら芭蕉庵の人々の消息を求めてゐるのである。ところがこの書簡を書き記した数日後、寿貞の死の報せが芭蕉の許に届けられた。六月八日付の同じく猪兵衛宛の書簡は計報を受けて、折返し筆を執つたものであらう。「寿貞無仕合もの、まさ、おふう同じく不仕合、とかく難ニ申尽ニ候。（中略）何事もく夢まぼろしの世界、一言理くつは無_レ之候」と記し、不仕合な寿貞の身の上に思ひを馳せて愁傷の歎きを述べてゐる。その悲歎の思ひは、前年の桃印を失つた折の落胆の氣持になほ勝るものがあつた筈である。それに前年には二十年来芭蕉につき従つた子飼ひの弟子嵐蘭を失ひ「さてく驚入たる事を被_ニ仰下_ニ、いまだ夢現わかち不_レ申、頃日さてく残念、愁傷兎角不_ニ分申_ニ云々」（元禄六年八月廿八日付）とその弟文左衛門に申し送り、又「嵐蘭ノ誅」を記して深い悲しみを洩してゐた芭蕉であつた。

斯うして親しい人々が先立つて行く氣持、それは迫る老の衰へと共に落莫とした思ひに彼を沈ませたことであらう。こ

の行脚に於いても芭蕉は人生の寂寞孤愁の思ひを愈々心中に深めたことと思はれる。芭蕉は落柿舎には六月中旬まで滞在してゐたやうで、十六日に膳所の曲翠亭を訪れ、曲翠、臥高、惟然、支考等と『続猿蓑』の「夏の夜や」の歌仙を巻き、続いて遊刀亭、木節亭等に足を運んだ。

芭蕉が故郷上野で魂祭りをする為に湖南を去つたのは七月上旬である。それも「伊賀にて同名屋舗の内ニ庵造候として、当月四日より門人共普請初盆前ニ伊賀へむかへ可申段々々越候間、盆へ旧里の墓参など可致と存候」（六月廿四日付、杉風宛書簡）と云ふやうに、故郷での肉親の魂祭りと伊賀の門弟達が赤坂町の兄の邸内に草庵を新築してくれたので、さうした門弟達に対する義理合ひとからでもあつた。そして盆会には「家は皆杖に白髪の墓参り」の句をよみ、寿貞のためには「数ならぬ身となおもひそ玉祭」の吟を手向けた。斯くて故郷上野の新庵に秋の日を消光し乍ら、諸処の俳席に列して門弟達の指導に従つた。併しさうした新庵の生活も長くは続かなかつた。推定露川宛書簡に「拙者盆が旧里に逗留罷有、伊勢の支考が来を待居申候。追付他歩致、冬押造（▼▼。「迫」の誤りか）候而越年ニ又旧里へ可帰覚悟ニ御座候」（八月廿日付）と述べてゐる如く、八月の末には支考の来遊を待ちうけて、共に他郷への吟遊を決意してゐたのである。而もこの希望は後述する如く、大坂への行脚となつたのであるが、芭蕉は大坂から伊勢参宮の予定であり、それも九月の神事を拝む希望を持つてゐた。この伊勢行きことは大坂で記したいいくつかの書簡に見えてゐることである。例へば、杉風宛のものには「追付参宮心がけ候故」（九月十日付）とあり、半左衛門宛には「長逗留へ無益之様ニ奉存候間、二三日中ニはせ、名張越にて参宮可申と奉存候」（九月廿三日付）と見える。

伊勢には当時支考がとどまつてゐて蕉門俳壇の経営に余念がなかつたのであり、それも相当な成功を収めてゐた。この

ことは閏五月廿一日付、曾良宛書簡に「萬子へいせ山田をしこなし、庵など結候而云々」と見え、同じく六月廿四日付、杉風宛書簡に「盤子へ伊勢山田を仕ふせ候而小庵を結候よし云々」とあり、芭蕉は伊勢参宮後支考の許に滞在し、支考を応援する希望であつた様だ。この予定は既に夏湖南にゐた頃から芭蕉の胸中にあつたのであり、前引杉風宛書簡は続いて「近々申来候故、伊勢下りかゝり為し申候へ共、先修行の爲且ハ二郎兵へ歸り候迄ハ木曾塚無名庵ニ一所ニ相勤申候、近比手柄とほめ申事ニ御座候。右之首尾故山田へも少し滞留ニ拙者も当秋冬之間ニまいらでハ、盤子為あしく候間、定而参宮がてら参可し申候」と見え、既にこの頃予定されてゐて、支考にも約束を与へてゐた様である。「続猿蓑」入集の支考の「今宵賦」の文中に、「魂祭る比は阿叟も古さとの方へと心ざし申されしを、支考は伊勢の方に住みどころ求て時雨の比はむかへむなどとおもふなり」とあり、「魂祭る比」と云ふのはこの年秋七月の湖南での支考、芭蕉の別れのことを指すのであり、「住みどころ求て」と云ふのは芭蕉を宇治山田に「時雨の比」迎へる為の庵の用意のことをさすものと思はれる。これは『笈日記』の支考の「松の葉につゝむ心を蓮の飯」の句の前書に「去年の秋は阿叟をまつべき便に、此国にかりの住どころもとめて、秋風や身につまされて二枚敷、と申侍りしに、卓犖不羈の心ざしも水雲にあきぬるか、阿叟のさみし給へりけるも、今年は吾草庵にその魂をまねき侍る。せめてはその時のほいなるべし」とある記事に一致するのである。

次に芭蕉は山田逗留後はこゝから近江の方へ廻る予定であつた様である。『笈日記』の「一夜静るはり笠の霜」の李由の句の後書に「李由申されしは、此叟のめでたくおはすならば、伊勢の行脚の後はかならず吾が月の沢にもとちぎりをきし事の、雨となり雲となりて、万里の幽冥にへだより行給へる事の、いかなる不幸にか侍らんとて、袂もぬるゝ斗きこへ侍るに、いざや君にさきだちて、いせへとちぎりをきしものは、いかになし侍らんとともに泣ける也」とあり、この行

脚のことは六月十五日付書簡に「秋の末初冬比御尋可^レ得^ニ御意^一候」と李由に宛て芭蕉は書き送つてゐたのであつて、伊勢行脚の後には江州月の沢の行脚を李由に約束してゐたのであつた。尙、正秀宛書簡には「当年之内何五七日之内なり共得^ニ御意^一候様ニと存候へ共、例ノ不定候。霜月之内ニハ何とぞ心がけ可^レ申候」（九月廿五日付）と見えてゐるが、これによると十一月の頃には湖南膳所に足を運ぶ予定であつた。そしてその後年末には再び伊賀上野に帰りこゝで越年するつもりであつた事は、前掲推定露川宛書簡の「追付他歩致、冬押造（マ、）候而越年ニ又旧里へ可^レ帰覚悟ニ御座候」とあるので明白である。更に新春を迎へてからは芭蕉は上方を去つて東武に早々帰庵する予定であつたやうである。それは許六宛の「今年若延引ニ及候へゞ来春下り懸ニ成共是非御尋可^レ仕候」（同六月十五日付）の文面に覗はれることで来春東武へ下りかけに湖東彦根の方に足を運ばうと云ふのであつた。

以上煩鎖に述べて来た事をまとめると、九月大坂に拄杖を曳き、それから九月の神事を拝みに伊勢に赴き、暫く山田の支考の草庵に滞在して同地の蕉門勢力の確立に力を注ぎ、十一月頃江州月の沢に廻り膳所に足を休め、年末になつて伊賀上野に帰つて越年、春になつて東武に帰らうと云ふ予定であつた。かうした事から理解される如く筑紫引杖のことはこの行脚中に一言も芭蕉の口から語られてゐず、寧ろ長崎へ赴く意向は殆どなかつたやうに思はれるのである。この事は或は東武を去る時は西国に下る筈であつたが、途中健康状態が思はしくなくてこの望みを放棄したのではないかと云ふ懸念を持たせるかも知れない。併し前述した如く芭蕉の健康状態は六年頃から既にすぐれなかつたのであつて、仮に若し途中で筑紫旅行の希望を放棄したのであつたら、芭蕉には相当残念に思はれたことであらうから、少くとも一言ぐらいこの事について門弟達に書き送つてゐさうなものであるが、さうした言葉は全く見出し得なかつた。

以上の諸事情から元祿七年の行脚の目的地は九州長崎ではなく主に上方巡遊であり、それも湖東・湖南・伊賀等の既成俳壇の育成と、門弟達によつて手をつけられてゐた伊勢・大坂等の新しい俳壇の開拓とであつたと思はれる。ところで、然らば桃隣の『陸奥衛』の記事をどう処理するかと云ふことであるが、芭蕉の門弟には長崎出身の去来がゐたから去来等から長崎の異国情緒についていろ／＼話を聞いたことであらうし、又、長崎には文通の門人たと云ふ去来の義理の従弟に當る卯七や去来の伯母田上尼、去来の弟の魯町・暮年等の俳人達もゐたのだから彼らの招きの書信などもあつたことと思はれる。で芭蕉の遊意は長崎に向つて動いたこともあつたらうし、さうした時に芭蕉の口から直接長崎行脚の希望が語られたものと思はれる。桃隣はさうした憧れにも似た希望をこの上方行脚に結びつけて、さながらその目的が西国でもあつたかの如く記したものと思はれる。あの行脚好きの芭蕉を、未踏の西国に結びつけたのは人情の自然ではなからうか。再言するが元祿七年の行脚に於いては出発当初から芭蕉には西国行脚の意図はなく、この行脚の目的はあくまで上方巡遊であつたらうと云ふことである。

(四)

故郷上野の新庵で盆会を過ごした芭蕉は、仲秋の月見の宴をこゝで開き「名月に麓の霧や田のくもり」や「名月や花かと見えて綿蟲」等の吟があつた。芭蕉は実際には名月後直ちに大坂へ出立する予定であつたが、大坂の酒堂・之道等との交渉も都合よく行かず、出発の日のはのび／＼となつた。さうかうしてゐるうちに八月二十日頃惟然が伊賀の芭蕉を訪れた。芭蕉は八月九日に去来に「名月過先参宮と心懸、九月の御神事おがみ可_レ申と存候。素牛（註、惟然）などいせの出合

所望ニ候へ、ひそかに其旨心得られ候様に御伝可^レ被^レ成候」と惟然宛の伝言を依頼してゐるのであり、惟然はこの伝言を受けて直ちに伊賀に赴いたものと思はれる。支考が斗徒を随へて伊勢からやつて来たのは九月二日のことである。『笈日記』によるとその来遊は大坂の旅寝の後に必ず伊勢に迎へん為であつたと云ふ。

支考を迎へた芭蕉は出発迄の数日間に彼と共に『続猿蓑』の撰に専心した。芭蕉の歿後四年目の元禄十一年に刊行された『続猿蓑』は、この芭蕉の撰に後に支考の筆が加へられたものであらうと思はれる。兎角して芭蕉が支考・惟然・次郎兵衛、それに又右衛門の四人を伴つて愈々最後の旅に出発したのは九月八日のことで、この日に定めたのは支考によると、南都で重陽の節句を迎へたい望みからであつたと云ふ。この日のことは『笈日記』に詳しいが、それによると送迎のことも思はしいと云ふので、早朝朝霧たちこめる伊賀盆地の城下町を出発した。芭蕉の老兄半左衛門は「かねて引わかれたる身の此後はあはじく」とこそ、あきらめつるに、たがひにおとろへ行程は別もあさましようおぼゆる」と云つて、同行者にくれぐれも弟の介抱のことを頼み、後影の見えなくなる迄見送つたのである。

芭蕉達一行は笠置から河舟で下り、途中で舟を上つて奈良に入り、猿沢の池のほとりに旅宿を求めた。翌九日の重陽の日は早朝奈良見物して後大坂に向ひ、生玉のあたりで日が暮れて宵月夜の明りに難波に入り、その夜は酒堂亭に泊つた。ところで伊賀から難波迄の行程を斯う記して来ると芭蕉は事もなく足を早めたやうに思はれよう。『笈日記』の奈良到着のことを記したところに「船をあがりて、一二里がほどに日をくらして、さる沢のほとりに宿をさだむるに、はい入て宵のほどまどろむ。されば曲翠子の大和路の行にいざなふべきよし、しめて申されしが、かゝる衰老のむつかしさを、旅にてしり給はぬゆへなるべしと、みづからも口おしきやうに申されしが、まして今年は殊の外によはりたまへり」と見えてを

り、これによると芭蕉は宿に着くや否や、「這ひ入つて」宵の内からまどろんだのであつて、それも甚だしい道中の疲労からであつた。曲翠は惟然が八月に伊賀を訪れた際、彼に芭蕉宛の書簡を依頼してゐたのであるから、その書簡にでも芭蕉を大和行脚に誘つてゐたのであらうか。曲翠がたつて大和行脚の同行を願ふのは旅での自分の衰老の苦しさを知らないからだと身の衰へを口惜さうに語つたと云ふのであるが、これらのことは往年の旅馴れた芭蕉を考へると全く寂寥の思ひがするのである。

特にこの秋は身体の衰弱が甚だしく「氣短かに身の骨もとがりぬ」（『行状記』）と云つた状態であり、その故にこそ老兄が殊更別離を惜んで介抱のことなども出発に當つてくれぐれも同行者に依頼したのであらう。この大坂旅行の途中の芭蕉の様子は従来『笈日記』の前引の記事以外に明かでなかつたが、昨年十一月長崎での去来展に出品された福岡市の内本浩亮氏蔵の曲翠宛芭蕉書簡に詳しく記されてゐるのである。本書簡は学界に未紹介のもので、次に全文を掲げる。

尙、御子共達御無事由目出度奉_レ存候。

遊刀貴墨辱拜見仕、伊州へも素牛便ニ御細翰文章玉句感心、且へ過つるむかしもおもひ被_レ出候。此度又御句あまた感心仕候。御秀作も少々拜見し候。是非存知より可_ニ申上_二候へ共、何角心いとも無_ニ御座_一取重候間、暫時閑暇を得候時分、委細貴報可_ニ申上_二候。さて酒堂一家衆其元御衆、達而心すゝめ候ニ付わりなく杖を曳候。おもしろからぬ旅寝の躰、無益之歩行悔申計ニ御座候。先伊州ニて山氣にあたり、当着の明る日よりさむき熱晚くニおそひ、漸頃日常の持病計ニ罷成候。爰元追付発足可_レ仕候。若へ貴境へめぐり可_レ申哉と支考なともすゝめくれ、先大寒不_レ至内ニ伊勢迄参候而其

後は勝手ニ可仕候。伊賀の大坂まで十七八里所、あゆみ候而貴様行脚の心ためしにと奉存候へ共、中／＼二里とハツゝきかね、あはれ成物ニくつをれ候間、御同心必御無用ニ可思成候。随分おもしろからぬ事と御合点可成候。達者成若法師めしつれられし御事こそ可為珍重御事候。爰元愚句珍しき事も得不仕候。

少々ある中ニ

秋の夜を打崩したる咄かな

此道を行 人なしに 秋の暮

人声や此道かへる共句作申し候。京江戸之状したゝめ候折ふしニ御座候而、早々何事をもわきまへ不申候

以上

はせを

書

九月廿五日

曲翠様

本書簡によると芭蕉は伊賀に出る当時既に風邪をひいてをり、これが旅の草臥を特に感じさせた原因であらうが、それにしても「中／＼二里とハツゝきかね、あはれ成物ニくつをれ候」と云ふ言葉は『笈日記』の記事と読み合はせる時、これとさら哀れを感じさせられる。本書簡は膳所の遊刀が九月二十頃大坂の旅店に芭蕉を尋ねた折に、遊刀が持参した曲翠の手紙への返事として、廿五六日頃の遊刀の帰郷のことづけて筆を執られたものであつた。之は加藤遅水氏蔵として伝へられてゐる同日付の正秀宛の手紙は本書簡と同時のもので同じく遊刀に依頼されたものである。勿論曲翠が芭蕉にあてた手紙の内容はわからないが、惟然にことづけて先便を送つてをり、それが『笈日記』に云ふ大和行脚の誘ひの手紙ではなか

死に近き芭蕉

つたかと思はれるので、「遊刀貴墨」と云ふ曲翠の第二信も再び行脚のことを云ひ来つたものではなからうか。「貴様行脚の心ためし」と云ふのも大和行脚のことを指すものと考へられるし、芭蕉は曲翠の大和路の旅の誘ひには「かゝる衰老のむつかしさを、旅にてしり給はぬゆへなるべし」（『笈日記』）と困惑してゐた様であるから、行脚同行の断りとして二里とは歩き得ない程くづをれてしまつたと惨めな大坂への道中のことを報じたものであらう。続いて「御同心必御無用ニ可ニ思成」候」とあるのも大和路への同道などは考へないで下さいと云ふ意味と思はれる。尙、「酒堂一家衆其元御衆達而心すゝめ候ニ付、わりなく杖を見候、おもしろからぬ旅寝の躰、無益之歩行、悔申計ニ御座候」と云ふのは如何なることを指すのであらうか。これらの点を今少し考へてゆくことによつて芭蕉の最後の旅寝の様子が幾らかでも明瞭になるのではなからうか。

(五)

路通の『行状記』には「菊月はじめつかた、難波より迎へしきりなれば、音信もだしがたしとて」と、前掲曲翠宛書簡と同様なことが記されてをり、この事は其角の『枯尾花』にも「心あらん人にみせばやと、津の国なる人にまねかれて、爰にも冬籠する便ありとて、思ひ立給ふも道祖神のすゝめ成べし」と見える。又、『木からし』入集の之道の「ちからなき御宿申せし時雨かな」の前書に「此たび浪華の下向を願ひ云々」とあつて、芭蕉に難波曳杖を懇請したのはこの之道と、同じく大坂の酒堂等であつた。

『蕉翁全伝』によると六月末より前のところに「我に似なふたつに破れし真桑瓜」の句があり、その前書に「難波の之

道訪らひし時」とあつて、閏五月半ば以前に、之道が伊賀に芭蕉を訪れてゐることがわかる。志田博士はこれを『木がらし』の之道の句の前書に結びつけて「之道が大坂への来遊を願ひに來たものであつたらう事が想像されるが、芭蕉の大坂客死の奇しき縁がこゝに結ばれたとも云へるのである」（『芭蕉の伝記の研究』）と解してゐられる。併し、この時に芭蕉から難波巡遊の確答を之道が得たかどうか、と云ふ事は疑問であつて、閏五月中旬から七月にかけての遊吟の折には芭蕉は難波には足を運んでゐないのである。そして閏五月廿二日、芭蕉が京に入つた時に酒堂は落柿舎に芭蕉を訪れてをり、次いで之道も芭蕉を尋ねて上洛し、暫く嵯峨の落柿舎に満在してゐる。

この酒堂・之道の上洛は恐らく難波に師の曳杖を願ふで爲であつたと思はれるが、併し彼等の仲は落柿舎の会でも同座を避けてゐるやうに思はれるふしがあり、又「大坂之道・酒道両門人別々ニ京迄飛脚音物指越、之道ハ二上リ參嵯峨ニ一所ニ居申候」（六月廿四日付杉風宛書簡）の文面から覗はれる如く好ましい状態ではなかつたやうである。それで八月に伊賀から芭蕉が、行脚についての書状を送つても「大坂より終ニ一左右無之、扱々不屈者共。さながら打捨候もおとなしからずと存候而、頃日自レ是酒堂まで案内致候バ、車要方より早々待申など、申来候。一円難ニ心得候」（八月九日付去来宛書簡）と云ふ如く不得要領な返書しか得ることが出来ず、その行脚も九月迄のび／＼になつてしまつたのであつた。かくの如く大坂蕉門の人々が伊賀や膳所の俳人達の様に協力して芭蕉を迎へ得なかつたのは、之道・酒堂と云ふ大坂蕉門の二有力者の間が面白くない状態にあつたからであり、二人の間にはおほい難い確執があつたのである。

酒堂はもと／＼近江膳所の人で浜田道夕と称する医者である。風律の『小ばなし』には「酒堂は膳所にて高宮治助と申よしに候」と見えてをり、或はこれは晩年に改名して斯く称したものであらうか。俳号は初め珍夕、後に珍碩と称し、元

祿初年に芭蕉の門に歸して、當時湖南に在つた芭蕉に親炙し、元祿三年には早くも『ひさご』の撰者となつた。元祿五年に後号酒堂と改め、その秋に遙々東武に芭蕉を訪れて翌六年一月まで草庵に同居して親しくその指導を受けた。この頃の俳諧をまとめたものが彼の第二撰集の『深川集』である。酒堂が大坂に居を移したのは六年夏のことで、翌年には『市の庵』の撰があつた。彼が再び湖南に歸つたのは何時の頃か明瞭ではないが芭蕉七回忌追善集として支考によつて元祿十三年に編集され翌十四年刊行になつた『帰花』には膳所のところに彼の追悼句が見えるので既にこの順膳所に歸つてゐたものと思はれる。尙、元祿十五年に正秀と共撰で板行した『白馬』の中に「粟津の南の門ちかく居をうつし侍りて」と前書した句が見える。その歿年は元文二年であるが享年は不明である。元文二年と云ふと芭蕉歿年の元祿七年から四十三年の後であるから相当長命したやうだし、芭蕉師事の頃は相当若く二、三十代であつたのではなからうか。

『旅寝論』『去来抄』の記事によると酒堂は風雅には相当熱心であつたやうだし、芭蕉もかなり関心を以つて彼を導いた様である。そして支考の『葛の松原』に「さてはおのれも皮骨を得ぬるをと、阿叟もにくみ申されし也」と記されてゐる如く、蕉風俳諧の理解も一通りならぬものがあつたのであり、その故に七部集第四の『ひさご』の撰者の位置を占めるに至つたのもあつた。去来の「不玉宛論書」に「酒堂子ノ俳諧當時ノ達人同門之内多トセス」と述べられてゐる様に彼の俳諧も同門に於いては相当高く評價されてゐたのであつて、その点では之道以上であつた。而も彼は前引の「不玉宛論書」には「酒堂子ハ宗匠也。点ヲ引事ヲ人トカメス。云々」と見えるが、この論書は元祿八九年頃のものと思はれてゐるもので、既に大坂転居後のことであるから酒堂はこゝで或ひは点者として点料によつて口を糊してゐたものと思はれ、この点多数の門弟を獲得する必要があり、同じ立場にあつた之道の勢力圏を必然的に侵すに至つたものであらう。

一方之道は槐本氏、大坂道修町に住してゐた藥種屋で伏見屋久右衛門と称してゐた。鬼貫の『仏兄七久留萬』の「此すゝき窓より吹や秋の風」の前書に「諷竹を東湖といひし昔の宅にて筒の花入に薄を入れて壁に掛たるを」と有り、前号を東湖と称してゐたことがわかる。『木からし』の「ちからなき」の句の前書に「たま／＼誹道にたづさはりてさし合もしらぬ身の己と文台をのぞきし事七年、曾てばせを老人は此道の長たり。外にたのむべきかたもなければ、このすじの師としてより今年又六年の春秋は過ぬ」によると蕉門に入る前に既に七年の間俳諧を手がけてゐた。元祿三年刊の『江鮭子』には「中の秋十日あまり、之道、芭蕉翁をたづねて行日、後のなつかしきを」と題した鬼貫と之道の両吟表六句が収められてゐるが、多分それも鬼貫やその他難波の俳人達と風交を楽しんでゐたのであらう。彼が芭蕉の門弟となつたのは「今年又六年の春秋は過ぬ」とある如く元祿七年から六年前のことであり、許六の『歴代滑稽伝』には「大坂之道後号諷竹洛にて見ゆ」と記されてをり、芭蕉対面の場所は京に於いてであつたことになる。

然るに『猿蓑』に「はじめて洛に入て」と前書した之道の「雲のみね今のは比叡に似た物か」の句があり、これを入門の為に上洛してゐた頃のものを見ると時節も夏と思はれるが、七年前の元祿二年の夏は芭蕉は『奥の細道』の旅にあつたのでこの年では合はない。彼の句が之道として俳書に初出するのは元祿三年刊の彼自身の撰集たる『江鮭子』からなので、彼の芭蕉入門は元祿三年ではあるまいか。『猿蓑』の「凡右日記」を見るとこの夏には幻住庵の芭蕉を尋ねてゐる。前述の『江鮭子』は、この年の秋に湖南に遊んだ折の俳諧を中心にして撰んだものであつた。『が己光』によると元祿五年夏に大坂の車庸と共に上洛し、湖南を吟遊して同地方の俳士を尋ねてゐる。彼の撰集は『江鮭子』の他に『淡路島』(元祿十一年刊)『砂川』(元祿十二年刊)『つんぼ猿』(宝永四年刊)等がある。後に之道が諷竹と改号したのは元祿八年の

頃からである。尙、安藤為章の「隠士長流」の資料として若沖の聞書と共に重要なものに風竹の手記があるが、その中に「元来拙者晩学之徒」とあり、長流晩年の門弟に諷竹なるものがゐたのである。森銑三氏はその『近世文芸史研究』に之を諷竹かと思はれるが定かでないとして述べてゐられる。注目すべき説なので参考迄にあげて置く。之道の歿年は従来不明とされてゐたが、豊後の長野馬貞撰『あさ雲雀』（宝永五年刊）に「諷竹追悼」として「人は陸月、梅はきさらぎをまたで世をはやうすと、聞より友達なりける人の許に申つかはす」と前書した「春雨の根取りやさらに袖の上」の馬貞の句が見える。これによるとその歿年は宝永五年一月と思はれる。

扱て酒堂と之道の関係であるが『江鮭子』の「白髭ぬく」の芭蕉・之道・珍碩の三吟歌仙、「焔立て」の珍碩・之道同座の歌仙、『己が光』の「螢見や」の珍碩・之道同座の歌仙、同集追加の「月代や」の車庸・珍碩・素牛・之道の四吟歌仙等から考へても、両者の仲は元禄五年頃迄は相当親密であつた様に思はれる。酒堂が大坂に居を移した元禄六年も秋の頃は酒堂亭の仲秋の月見の宴に之道は出席してゐる。ところが翌七年夏の酒堂の『市の庵』には之道の発句が「贈酒堂」と題して各地の蕉門俳人の句が並べられてゐる中に一句収められてゐるに過ぎない。而も入集の連句三巻は何れも酒堂出座のものであり、特に「宵の間や」「夏山や」の二巻は大坂俳人との間に興行されたものであるが、同じ土地の数少い同門俳人であり乍ら之道は一座してゐない。これから考へるとこの比は既に二人の仲は面白くなくなつてゐたのであらう。彼等の仲違ひの原因は何によるのか不明であるが、『市の庵』の大坂俳人同座の歌仙二巻の連衆が酒堂の門下、及びそれに近い人と思はれるので、酒堂が点者としてこの地で新しい門弟を多く獲得してゆくにつれて之道がそれを快く思はず遠ざかる様になつたものであらう。

芭蕉が大坂に行脚の筈を留めた頃の大坂俳壇は斯う云ふ状態にあつた。許六の『歴代滑稽伝』には「大坂珍碩を助け、元祿七戌の十月十二日、痢疾をうれひ、云々。」と記されてゐるので、芭蕉が大坂に足を入れたのも或は酒堂を助けて之道との仲の解決を計らうと考へたものかも知れない。が、果して芭蕉の仲介は効を奏したであらうか。

九月十四日の畦止亭、廿日前後の亀柳亭、廿一日の車庸亭、廿六日の清水の茶店、廿七日の園女亭、廿八日の畦止亭等の俳席には酒堂も之道も出席同座してゐるのである。芭蕉は九月廿五日に正秀に宛て「爰元衆俳諧もあら／＼承候。之道・酒堂両門の連衆打込会相勤候。是より外ニ拙者働とても無御座候」と報じてゐる。之道・酒堂両門の合同の俳席で成つた俳諧は明かでないが、少くとも同座を避けてゐた酒堂・之道が斯うして芭蕉を中心とした俳筵に列座したと云ふ事は芭蕉の大坂訪問の成果とも云へよう。だが良く考へてみるとそれも表面上のことと兩人の間には心からの和解がなつてからのこととなく、老師仲介の義理からであつたやうだ。酒堂が九月廿八日の畦止亭での会を最後に、病翁芭蕉の周辺から忽然と消え去つて行くのはどうしたわけであらう。

芭蕉が廿九日から激しい泄痢を催して病臥して後、之道は門弟舍羅・吞舟と共に甲斐／＼しく師の側に侍してその看護に当り、十月八日には住吉の社に詣でて師の延命を祈つてゐるのに、酒堂は芭蕉の看病は勿論のこと、一度も師の病床を訪れたことがなかつたのか、芭蕉の病床生活を伝えるに詳しい『枯尾花』の「終焉記」にも、『笈日記』にも酒堂の名はさうに見えない。而も芭蕉歿後は追善集『木がらし』に之道は「(前略)此たび浪華に下向を願ひあへなくその十月中の二日にをくれ侍りぬ。かなしくなきがらを同門にわたして舟を見をくり、人しれず棺にむかひて永きはなむけをさ／＼」と前書して「ちからなき御宿申せし時雨かな」の追悼吟を寄せ、七日後の十月十八日には義仲寺の芭蕉の墓に詣でて追善の俳

諧興行に参加してゐる。その後も三七日、三回忌、七回忌等追善の句を諸集に見出し得る如く、これらの追善の句を捧げて師の冥福を祈つてゐるのに、一方酒堂は追善俳諧には全く出席しなかつたのかその名は見えず、追善集の類にも七回忌以前の彼の追悼吟は見えない。漸く七回忌になつて彼と正秀共撰の『白馬』に「翁の玉まつりに木曾塚の庵へ参りて」と前書する「盆の来て弟子を集る薄の穂」の追善句が見えてゐるに過ぎないのである。この句は「月見せん弟子を集て薄の穂」と改められて支考撰七回忌追善集『帰花』の追善俳諧の膳所のところの発句として入集してゐる。

ところで前述した如く病床の芭蕉の周辺から酒堂の消息を得ることが出来なくなつたと云ふ事は、誠に不可解なことであり、或は酒堂は何処かに旅行中ではなかつたかと云ふごとき推測をさへ許すことになる。併し師の来遊を願つた張本人が師の健康がすぐれなくなつてから旅に出られるものだらうか。仮に止むに止まれぬ急用で旅に出たとしても帰坂後追善俳諧に参加出来ようし、追善集に悼句を寄せることも出来よう。長旅だとしても一周忌や三周忌には帰つてゐさうものだ。或ひは帰つてゐぬにしても、悼句位寄せて来さうなものだ。然るに前述の如き状態であつたとすれば、そこに何か複雑な事情があつたのではなからうか、――斯う考へて来て思ひ当るのは、許六の『俳諧問答』である。

許六はその「自讃之論」中に俳諧の道に叫ぶ条件として芭蕉の説を六ヶ条あげて「珍碩がごとき人にあらず」と記してゐる。これは珍碩がこの六ヶ条のどれかに缺けるところがあつたものと思はれるが明らかでない。又同じく「自讃之論」の後の方に「路通・酒堂ごときもの、一生の行跡嚙々乱墮ならん。是すこしも予がさばりに成る事にあらず。この路通といふ者を見るに、俳諧も乱墮なり、一ツとしてとる所なし。しかれども先生（註、去来）は急度路通・酒堂ごときものをにらみ法を正したまふ事、尤至極なり。先生法をみだりたまふ時は、末々の門人猶みだりに成て法を失ひ侍るべし。湖南の

門人酒堂を本のごとくに用ひたまふ事、翁在世においては、湖南の衆、かくはちなみたまふ事成まじ」とかなり痛切に酒堂を攻撃してゐるのである。而も、あの不実輕薄な路通と並べて槍先にあげられてゐるところに、酒堂に路通同様な不実背信の行為があつたと云ふことを裏書するものではなからうか。

芭蕉は病臥の頃は之道亭に宿泊してゐた様であるから、芭蕉の親愛の情が大坂滞在中に酒堂より之道に傾き、酒堂はそれを嫉み、師の態度に不満を感じて芭蕉に背くことになつたのではなからうか。そして師の臨終の床にも再び近づかうとはしなかつたのだ。七回忌のあの追悼吟にしても単に同門俳人の信賴を再び回復しようとして師の墓前に捧げたものとも思はれる。尙、一言すれば酒堂・之道は芭蕉歿後再び離反し反目しあつてゐた様で、之道はその撰集『淡路島』『砂川集』に一句も酒堂の句を採録せず、俳諧の席に於いても二度と同座することはなかつた。斯う考へてみると芭蕉の大坂滞在は二人の和解といふ意味からは、全く徒勞に歸したやうだ。前掲曲翠宛書簡に「おもしろからぬ旅寢の躰、無益の歩行、悔申計ニ御座候」と述べてゐるのも芭蕉自身が最も良くこのことを知つてゐたものではなからうか。それ故に亦門人間の醜い争ひの中から身を退いて次の目的地に旅立たうと考へて兄半左衛門に「長逗留ハ無益之様ニ奉レ存候間、二三日中ニはせ、名張越にて参宮可レ申と奉レ存候」（九月卅三日付）と云ひ送つたのであらう。

もと／＼芭蕉がこの大坂行脚を面白からぬ旅寢と云ひ、無益の歩行と云つたのも上述した酒堂・之道の確執だけでなく、それに加ふるに彼の身体具合も影響してゐたと思はれる。大坂到着後の芭蕉は前掲曲翠宛書簡に「伊州ニて山氣にあたり、当着の明る日よりさむき熱晚／＼ニおそひ、漸頃日常の持病計に罷成候」と述べてゐる如く、伊賀でひいた風邪の熱に明暮悩まされてゐたのである。このことは兄の半左衛門宛書簡にも「大坂へ参候而、十日之晩よりふるひ付申、毎晩

七ツ時より夜五ツまでさむけ熱、頭痛參候而、もしハおこりニ成可_レ申かと葉給候へバ、廿日頃よりすぎとやみ申候」とさうした風邪の熱が二十日頃までも続いたことを述べてゐるのである。ところで、この曲翠宛書簡中の「伊州ニて山氣にあたり」と云ふのは注目すべき言葉である。志田博士は『芭蕉の伝記の研究』に於いて、芭蕉の死因を其角の『枯尾花』に「伊賀山の嵐紙帳にしめり、有ふれし菌^{イサビラ}の塊積^{ツツキ}にさはる也」とあるのを第一近因、続いて「苦しげなれば例の葉といふより、水あたりして、長月晦の夜より床にたふれ、泄痢度しげくて、物いふ力なく、手足氷りぬれば」とある「水あたりして」を第二近因として考へてゐられる。併し、従来その死の原因を遠く伊賀での風邪とするのは『枯尾花』だけであつて、他の資料に於いては全くこのことに就いては記されてゐない。其角が伊賀での風邪を死因の一つとしたのは『枯尾花』に「九月二十五日、膳所の曲翠子よりいたはり迎へられし返事に、此道を行_レ人なしに秋の昏、と聞えけるも、終のしをりをしられたる也」と記してゐるごとく「終焉記」の執筆に當つて、実はこの曲翠宛芭蕉書簡を参照してゐるのであつた。『枯尾花』の「木がらしや」の曲翠の句の前書によると十月十六日に曲翠は其角を幻住庵に案内してゐるので、この折にでも本書簡が其角に示されたものと思はれる。

擬て、芭蕉の風邪熱は二十日頃まで十日余りも続いた。十三日には小康を得たので住吉の市に出かけたものの、矢張り熱の為途中から引返したのである。かうした状態であつたから十四日の畦止亭での歌仙を除いては廿一日の其柳亭での俳筵迄見るべき俳諧は何もないのである。恐らく廿日頃までは風邪のために床につきがちであつたものと思はれる。ところで酒堂・之道の兩門弟の確執の中に身を置いて、人生の黄昏が間近くせまつたと感じられる程の老の身の衰へ、風邪熱に苦しめられる不快な日夜、それは面白からぬ日夜であらうし、その成果も芭蕉が期待してゐた如く思はしくなかつたのであ

り、それ故に無益の行脚と考へられたのであらう。このやうな旅の空に於いて芭蕉の胸中に過ぎ行く秋の淋しさと共に沈
潜し胚胎していつた句が「此道を行行人なしに秋の暮」であつた。この句が最初に見えるのは前掲曲翠宛書簡より二日前に
記された九月廿三日付意専・土芳宛書簡で「秋暮」と前書して同形で見えてゐる。「人声や此道かへる」の異形を報じた
のはこの曲翠宛書簡が初めであるが、支考は『笈日記』の廿六日のところに「人声や此道かへる秋のくれ 此道や行人な
しに秋の暮 此二句の間いづれをかと申されしに、この道や行ひとなしにと独歩したる所、誰かその後にしたがひ候半と
て、是に、所思といふ題をつけて、半歌仙侍り。爰にしるさず」として両形を掲げ、芭蕉がどちらを採るか相談したので
「此道や」の方を推したやうに述べてゐるが、之は此曲翠宛書簡によつても、芭蕉が「此道や」の方を自らよしとして
ゐたことを知り得よう。本来この句は「秋暮」と題した如く敘景的な句であつたのかも知れぬが、その景は又、芭蕉自
身の心象風景でもあつたわけで『笈日記』に云ふ如く初五を「此道や」と改めて「所思」と題したやうに後には心象風景
の方を強く打出したのであつた。つまり秋の暮は芭蕉自身の落莫たる人生の夕暮を指すのであり、此道とは彼の人生行路
そのものであり、更に局限すればそれは彼が「仕官懸命の地をうらやみ」「仏籬祖室のとぼそにいらむ」としながら、遂
に己れ自身を絶え間なく鞭打ちつゞけることによつて確立しようと思つてゐた俳諧の道であつた。芭蕉は屢々俳諧の「道
の建立」と云ふことを説いてゐる如く、芭蕉にとつてはそれは終生の目的であり大きな理想であつた。絶えず自ら責め乍
らも今尙到り得ぬ道である。而もその道を辿るにはもはや余りにも老い衰へてゐる。一旦二里も歩き得ずくづをれた老身
の衰弱、芭蕉にはひし／＼と年の名残が感じられたのであらう。己れが駄目だとすると他に誰がゐよう、門弟は数多い、
併し己れ以外に一鉢境涯に甘んじて道を究めやうとする者は誰もゐない。其角・嵐雪らの高弟でさへ「輕み」の追究を志

すことさへしない、彼等の多くは所詮名利にとらはれて酒堂・之道の如き醜い争ひに精根を耗らすのがおちである。それは余りにも淋しいことだ、芭蕉は斯うして人生の夕暮の中にぼんやりと佇んで、行く人としてない遙かな道を淋しく眺めてゐたのであつた。

斯くて長期の風邪患ひによる身体の衰弱、加ふるに廿日以後の度重なつた俳席の饗応は芭蕉の持病であつた疝氣を惹き起し、泄痢をとまなふに至り、行脚の杖を曳いたことを後悔してゐた土地で芭蕉は遂に再びたつことが出来なかつたのである。（昭和廿九年二月二十四日）

【附記】

挿入の芭蕉の曲翠宛書簡の写真は、内本浩亮氏から惠贈を受けたもので、本文中にその資料的価値を論じたごとく、最晩年の芭蕉の心境を示す最も貴重な資料のひとつである。その紹介を許された内本氏の御厚意に深甚なる謝意を表する。野坡筆芭蕉像の方は、九大医学部教授金関丈夫博士が福岡市唐人町の一古物商の店頭に見えられ、筆者に報じて下さつたもので紙本淡彩の一軸である。芭蕉の像は、従来門人筆のものでは、杉風・許六・破笠・瓢箪（蚊足の画号か）・百歳等のものが伝えられているが、こゝに新らたに野坡筆のものが加へられたわけである。いづれもいく分づゝ似たところがある様だが、中にも之は許六筆のものに似てゐる。許六の『韻塞』に、翁の一周忌に、許六が芭蕉像を自ら描いて野坡に贈つたことが見えるが、その図と何か関聯があるかも知れない、野坡は、芭蕉の最後の庵住時代最も翁に接近してゐた門人だから、翁の晩年の姿を熟知してゐた筈で、その意味で「死に近き芭蕉」の姿を伝えてゐると思はれる。「月はなや旅の翁の筆はじめ」の句は勿論、翁像の野坡筆なる事は画面の右下に野坡の印が捺されてゐる事から確認される。この一軸は博多織の老舗松居家に伝来したもので、博多は野坡の勢力の最も及んだ土地の一つだから、この地に伝来した事も当然と思はれるのである。